

原爆文学研究会報

第三一號

原爆文学研究会 二〇一〇年八月

おはなし 鬼にひと呑みにされた一寸法師。あわやこれまでかと思いきや、鬼の腹の中を原爆瓦でゴリゴリこすって大暴れ、鬼は痛みあまり七転八倒……。井上ひさしの戯曲『父と暮せば』（初演こまつ座、一九九四年）の中で、父が娘の前で一席ぶつてみせる「おはなし」です。

町の図書館に勤める娘は、広島に伝わる昔話をお年寄りから聞き集めて子供たちに話して聞かせる「おはなし会」の準備に余念がない。そこへ横から首を突っ込む父。生まじめな娘が身振りをまじえて語ってみせる「おはなし」に、それではいまだきの子供にウケまい、と父はけちをつけ、子供たちがよく知る「一寸法師」に〈原爆〉を混ぜ込みアレンジしてみせる。一寸法師のとおきおきの武器は、爆風で一瞬のうちに変形し剣山のように鋭く毛羽立ってしまった〈原爆瓦〉、という具合に。ひょうきんに演じている父の様子が次第に鬼気迫っていく。あの日父を見捨てて被爆を生きのびた娘は、激しく動揺する。――

終始父娘二人の掛け合いで展開されるこの戯曲は宮沢りえと原田芳雄のキャストイングで映画化されました（黒木和雄監督、二〇〇四年）。原田扮する父の、ロングテイクによるこの「一寸法師」のシーンが圧巻です。ところで、〈銃後〉という言葉の意味がわからない世代がいる、と『現代民話考（第二期）I』（立風書房、一九八七年）の冒頭で松谷みよ子は嘆いています。当時は戦後四十余年。電車の吊り広告に「銃後の妻たち」という週刊誌の見出しを見つけ、ほう、と思つてよく見ると、それは暴力団の妻のことだった。啞然とする一方で「これ自身が現代の民話ね」と可笑しかった、と松谷は述べています。『現代民話考』は〈現代〉を生きた人々によって語られる体験談や怪談等の〈民話〉を集めるシリーズ本。ちなみにこの「第二期」I巻のサブタイトルは「銃後」、つまり、女ごどもお年寄りによる戦争の語りを中心に集めた一冊です。〈原爆〉の語

りも、もちろん含まれています。例えば、被爆直後の広島街なかで、しきりに長い帯を懐におさめているモンペ姿の老婆に、ある人が「おばあさん、帯などどうでもよいから早く逃げなさい」と声をかけたところ、老婆は「こりや、わしのはらわたでがんす」と答えたという「おはなし」。笑うべきか神妙になるべきか、被爆直後のまぎれもない現実です。

いまだきの一とにウケない？ よしそれならば……残されるべき「おはなし」は、あの手この手でしたたかに語り継がれています。（内田友子）

第三一回 原爆文学研究会報告

二〇一〇年七月三二日（土）九州大学西新プラザで開催した第三一回研究会には約二〇名が参加。



岡村氏の発表については「なぜ『原爆の凶』第四部以降の絵解きは第三部以前のものに比べて極端に短くなっているのか」「『原爆の凶』の成立過程において芸術性の追求と記録性の追求の比重はどのように変化しているのか」等の質疑がありました。服部氏の発表については「なぜ八四年に長崎で『原爆の凶』展が開催されたのか」「八四年の長崎で米国の原爆投下責任を問い直す動きは起らなかったのか」等の質疑がありました。

◇ 研究発表 1

発掘された記憶

— 1952年『原爆の図』北海道巡回展

岡村 幸宣

二〇〇九年、目黒区美術館の正木基学芸員によつて、雪の降る建物の前に二人の青年と約三十人の子どもが並ぶ集合写真が発見された。一九五二年一月に三菱美唄炭鉱で行われた「綜合原爆展」の貴重な記録だった。その後、美唄の郷土史家・白戸仁康の調査によつて、三菱美唄炭鉱労組本部が会場となり、一月二七日、二八日の両日で約一万人が参観したことが明らかになった。

ところが丸木俊の回想する北海道の「原爆の図展」は、一九五一年秋の室蘭、旭川、秩父別、札幌、函館だけで、美唄に触れていない。これほど多くの人が観た展覧会の記録がなぜ残っていないのかという疑問から、『北海道新聞』で証言を募集したところ、北海道立図書館に遺された元北大教授の「松井愈氏資料」の存在を教えられ、一九五二年一月から四月にかけて全道二九会場の巡回展が行われたことが明らかになった。また他の証言からは、画家の濱田善秀、元国鉄職員の吉崎二郎が帯同したことも判明した。しかし、この巡回展は、一九五二年三月に新潟ではじまったヨシダ・ヨシエ、野々下徹による『原爆の図』巡回展と二カ月ほど時期が重なっている。

その謎を解いたのは、当時三菱美唄炭鉱労組文化部長の本間務が所蔵していた写真だった。そこには、会場で署名をする女性の背後に第三部『水』が写っていたが、丸木美術館が所蔵するものとは人

物描写や背景の墨の流し方が微妙に異なっていた。実は『原爆の図』三部作は二組存在し、美唄に展示されたのはもうひとつの『原爆の図』だったのだ。

俊は、一九五〇年頃、『原爆の図』米国展の計画が持ち上がった際に、もしものために「片瀬の山小屋の住人」に手伝ってもらいながら、『模写』を制作したと回想している。一九五二年五月五日付『北海道大学新聞』に「赤松丸木両氏との共同製作者浜田氏」とあるのので、『模写』を手伝った「山小屋の住人」は濱田で、受け入れ側も『模写』と承知していたことが推測される。おそらく、北海道から二度目の巡回の申し出が来た際、丸木夫妻は『原爆の図』を託すことに不安を感じ、濱田に『模写』を持たせたのだろう。全道で一五万人を集めた巡回展の記録が残らなかったのは、こうした理由があったようだ。

北海道から戻った『模写』は、一九五二年夏に都立大学の学生によつて田無や立川などで展示された。当時の学生は、『模写』については議論になった。原爆を伝えることが大事という肯定派、傑作だから再制作するのは芸術家として問題という否定派に分かれた。根底には、絵の質が落ちるといふ問題があった」と振り返る。俊も「どうしてもはじめの絵のような迫力がない」と感じ、『模写』はやがて門外不出となった。

しかし、一九七四年に丸木美術館栃木館が開館すると、『模写』は丸木夫妻によつて加筆され一般公開された（一九九六年に広島市現代美術館に寄贈）。『模写』と呼ぶのが適当なのか、『再制作・加筆版』と呼ぶべきか。ともあれ、この作品とオリジナルを比較し、受容の歴史をたどり直すことで、『原爆の図』の意義や、芸術性と記録性の問題なども、新たな読み方が見えてくるように思える。

◇ 研究発表2

長崎の「原爆の図」展

——一九八〇年代における長崎の反核・平和運動——

服部 康喜

長崎において「原爆の図」展が開催されたのは第一回展（一九五三）と第二回展（一九八四）の計二回を数えることができる。前者はその前年の一二月、「ヒロシマ・ピース・センター」の呼びかけによって「長崎原爆乙女」の治療に向けた運動が大きく前進した状況下において開催されたもので、いわば長崎における被爆者の発見と彼らへの救済が長崎の世論の高まりと共に、多くの賛同者を獲得して行った中で開催であった。一方、後者は一九八〇年代に顕著であった一連の巨大企画（イベント）の嚆矢をなすもので、沖縄戦の悲劇から触発された「平和の母子像」建設（一九八七）、「心に刻むアウシュビッツ長崎展」（一九八九）と続いて開催される企画（イベント）と深い関連を持ったものであった。

「原爆の図」展に関して言えば、第一回展と第二回展とは大きな違いを認めることができる。それは後者においてはプロテスタント・キリスト者が当時の長崎で活動していた各種反核・平和市民団体及び労働組合、また各種宗教団体の力を糾合する勢力として前面に出てきたことである。特に、「原爆の図」展の事務局長として実務を担当した長崎銀屋町教会小林正直牧師は、以後の企画の精神的な指導者として、また実質的な企画・運営に直接関わった担当者として登場する。

そもそも長崎のプロテスタント・キリスト教会及びその関連の組織（ミッションスクールやYMCA及びYWCA）にとって、米軍支配（広島・長崎には米軍の直接統治機関として軍政府が置かれていた）は決して歓迎されざるものではなかった。戦中のキリスト教に対する弾圧からの解放と、戦後の軍政府によるキリスト教会と関連する組織の復興と支援は、冷戦下において、ともすれば反核・平和運動への取り組みを遅らせる原因となっていたことは否定できなかった。そこには原爆反対⇄反米という要素がどうしても絡まって来るからである。しかし、一九八〇年代において、その構図は大きく変化していた。

銀屋町教会小林正直牧師が、長崎の「原爆の図」展開催に向けて大きく歩みだした背景には、彼が京都時代（京都西田町教会牧師）から関わった水俣病訴訟支援が原点にあった。さらに彼の原点は戦中に中学生として軍国主義教育を徹底的に教え込まれた苦い体験があった。こうしたことに加えて、戦後の日本基督教団の体質の変化——米国教会からの豊かな伝道資金の提供と伝道支援から米国教会からの自立と地域の問題を担う教会の使命の発見——があった。こうして水俣—沖縄—長崎—アウシュビッツを結ぶ加害の記憶と抑圧された者、犠牲になった者への共感と忘却の拒否という信仰的な立場から、イデオロギーを超えた市民の力を結集することが可能となった。しかし、イデオロギーや組織の違いを超えた多くの長崎市民の参加によって可能となった巨大イベントの時代は一九八〇年代をもつて終わることになる。

彙報

第三一回原爆文学研究会

- 日時 二〇一〇年七月三二日(土) 一四時より
- 会場 九州大学西新プラザ中会議室
- 研究発表
- 発掘された記憶

——1952年『原爆の図』北海道巡回展
長崎の「原爆の図」展

岡村 幸宣
服部 康喜

機関誌「原爆文学研究」第九号原稿募集

- 「原爆文学研究」第九号を二〇一〇年一二月に発行いたします。左記の要領で原稿を募集いたしますのでふるってご投稿ください。
- 書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。
- 投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一〇年一〇月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付しての投稿の場合は同年一〇月末日。
- 発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇〇〇円を発行経費として負担する。
- 投稿宛先 〒八五七一一一九三 佐世保市沖新町一一一 佐世保工業高等専門学校 中野和典研究室

日本社会文学会との共催について

- ※新たにオープニングイベント「劇的朗読会」が加わりました。
- 二〇一〇年度日本社会文学会秋季大会・第三二回原爆文学研究会
- 大会テーマ「原爆体験と表象／文学——過去からの呼びかけ、未来への語りなおし——」

○ 日程 二〇一〇年一〇月二・三日(土・日)

○ 会場 広島大学東広島キャンパス学生会館二階レセプションホール

○ オープニングイベント 劇的朗読会「慟哭―広島、あい―」松川 真澄

○ 研究発表

「女性と沈黙——林京子を中心に」 姜 東星(*野坂 昭雄)

「小説カルポルタージュカ——核時代の表象と大江健三郎——」 山本 昭宏(*島村 輝)

「核時代における人間の崩壊と歴史の再生——堀田善衛『審判』試論——」 矢崎 彰(*高野 吾朗)

「主体のゆらぎ——大田洋子「山上」を中心に」 中野 和典(*山口 直孝)

○ 講演「肯定形としての〈原爆〉——占領期のいくつかの言説——」 河西 英通

○ 一〇月三日 九時一〇分より

○ シンポジウム 「原爆表象／文学と政治的リアリズム」

・基調報告

「誰が「広島」を詠みうるか？」 松澤 俊二

「見なかつた者が描く絵画——非目撃者による原爆の視覚的表象」 加治屋 健司

「知的概観的な時代」の「表現行為」について

——三島由紀夫を視座として「加害」と「被害」を考える—— 柳瀬 善治

〔司会 深津 謙一郎・水川 敬章／コメント 岩崎 稔・加納 実紀代〕

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一九一〇三九五 福岡市西区元岡七四四

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-802-5631 e-mail nanrigata@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>